

沖ノ島研究

第六号

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会

令和二年三月

沖ノ島研究 第六号 目次

津屋崎地区の海浜型古墳について……………	池ノ上 宏……………	1
御米注進状・御米銭注進状にみる宗像氏貞領の郷村……………	桑田 和明……………	9
最後の大宰府守護所下文と宗像大宮司家……………	野木 雄大……………	25
新発見の豊臣秀吉文書と肥後宗像家……………	花岡 興史……………	37
《調査報告》		
沖ノ島への眺望……………	岡 崇……………	61
北九州市若松区小竹の沖津宮遙拝所について……………	鎌田隆徳・松本将一郎・大高広和……………	67
「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群に関わる調査研究事業 二〇一九年度調査概要……………		81

津屋崎地区の海浜型古墳について

池ノ上 宏

はじめに

「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群は、二〇一七年七月に世界文化遺産登録された。世界遺産委員会の勧告により、日本および周辺諸国における海上交流、航海およびそれに関する文化的・祭祀的実践についての研究計画を継続・拡大させることを求められている。著者が勤務する福津市には、沖ノ島へと続く海を見渡す台地上に造られた新原・奴山古墳群がある。古墳群は大小の墳丘によって構成され、沖ノ島を崇める伝統を育んだ宗像氏の存在の物証である。新原・奴山古墳群は、五世紀から六世紀にかけて当時の入海に面した台地上に築かれた。現在は入海の大部分は干拓等により水田となって見ることはできないが、古墳群東端の高台に福津市が整備した展望所からは、この旧入海の水田とその先に広がる玄界灘が見渡せ、この古墳群が海を意識して築造された事を実感できる。

新原・奴山古墳群と同じように海を意識した古墳については、これまで多くの研究者が注目している。近藤義郎は岡山県牛窓湾周辺に造られた五基の前方後円墳について、山麓が海岸まで迫っており平地がなく、農業に

著しく不適な地において前方後円墳が築かれた背景にヤマト政権による朝鮮半島への航路上の寄港地としての牛窓の機能を想定した^①。西川宏は対象を瀬戸内海全域に広げ海に関わる古墳を抽出し、前期古墳の立地の付近に「港湾や泊地としての機能を十分に果たす地」があることを示した。また、ヤマト政権によって掌握された在地の有力首長層の古墳と、単独で築造される「孤立墳」についてヤマト政権から派遣された首長の古墳である可能性を指摘した^②。間壁忠彦は瀬戸内海沿岸の首長墓が六世紀に減少することについて、ヤマト政権による朝鮮半島政策の変化による国内支配体制強化、海路をヤマト政権が直接支配することによるものとした^③。森浩一は瀬戸内海の臨海部に立地する古墳に対して日本海側に分布する「潟湖」と首長墓に相関関係があり、潟湖を良港として利用する流通ルートが存在し、潟湖の港を維持するため政治権力が生まれ古墳築造につながるとした^④。広瀬和雄は臨海部に立地した古墳を「海浜型前方後円墳」として「第一に、各地域で最大級であること。第二に、偏在性をもって前方後円墳が築造されているものが多い。第三に、首長墓としての連続性が乏しいものが多い。第四に、海から見えるような交通の要衝に立地する。」と

定義した。その築造には二つの画期が見られることを示し、第一の画期は四世紀後半頃、第二の画期を六世紀後半頃とした⁵⁾。

近年は、各地の「海の古墳」の実態を明らかにする研究会「海の古墳を考える会」が各地域の研究者の協力によって、これまで六回開催され、各地の「海の古墳」の実態についての報告がなされている⁶⁾。

本稿では、以上のような諸研究に導かれつつ、新原・奴山古墳群を含む津屋崎地区の古墳群、すなわち胸形君⁷⁾の古墳群について述べる。

本稿で扱うものは古墳築造に際し「海との関わり合い」がある古墳である⁸⁾。魚津知克は「海を舞台とした人間活動と深い関連をもつ脈絡により、海の近くに築造された古墳」と定義している⁹⁾。この定義を著者も肯定する。名称については魚津がまとめているように¹⁰⁾「海の古墳」「海辺の古墳」「臨海性の古墳」「海を意識した古墳」「海人の古墳」「海洋指向型の古墳」¹¹⁾と様々なものがある。著者は二〇一三年に公益財団法人かながわ考古学財団主催で開催された「シンポジウム海浜型前方後円墳の時代」で広瀬和雄が提唱した「海浜型前方後円墳」⁵⁾をふまえ、前方後円墳だけではなく古墳時代の墳墓全体を扱うため「海浜型古墳」とする。なお、古墳の時期区分は、『前方後円墳集成』の時期区分に従う¹²⁾。

一 海浜型古墳の分類

津屋崎地区の海浜型古墳の性格を理解するには分類して比較検討することが必要と考える。これについて、著者は魚津の分類に準拠する¹⁰⁾。魚

津は「海の古墳」を「規模」「立地」「海岸線と前方部の向きとの関係」の三点に着目し分類しているが、「海岸線と前方部の向きとの関係」は本稿では使わない。また海浜型古墳については、魚津と同様に古墳時代の推定海岸線から原則八〇〇メートル、最大一キロメートル以内に立地する古墳とする。

〈規模による分類〉

A群 地域内集団の構成員の墓。群集墳や横穴墓に加えて、墳丘を持たない石棺墓や埴輪棺といった多様な埋葬施設にする墓が含まれる。

B群 地域集団を統括していた地域首長の墓。数十メートル規模の前方後円墳や帆立貝式古墳や円墳が含まれる¹³⁾。

C1群¹⁴⁾ 地方支配者層の墓。古墳時代前期から中期にかけては全長一〇〇メートル、後期では全長六〇メートル以上の前方後円墳・前方後方墳およびそれらに追隨する規模の帆立貝式古墳・造り出し付き円墳・大型円墳などである。

〈立地による分類〉

S類 海拔一〇メートル以下の海岸部に立地している。

t類 海拔一〇メートル～五〇メートルという比較的低い海岸段丘・丘陵・砂丘上に立地している。

u類 海拔五〇メートル以上の海岸段丘・丘陵に立地している。

二 津屋崎地区の様相

海浜型古墳を考える上では古墳時代の海岸線の復元が重要になる。津屋崎地区においては宗像市史、津屋崎町史を編纂する一環で縄文時代前期の海岸線復元が行われている。公共工事に伴うボーリング調査資料と追加実施したボーリング調査を基に復元されたものである¹⁵⁾。

津屋崎地区では、現在津屋崎から勝浦へと広がる水田地帯に縄文時代は海が入り込んでいたことがわかった。この入海は「勝浦潟」とよばれ、勝浦峯ノ畑古墳南側の水田まで海が入り込んでいた。古墳時代の海岸線復元は難しいが、一七世紀初めに描かれた「筑前国図」¹⁶⁾から見ると、当時にあっても新原・奴山古墳群近くまで海が入り込んでいたようである。津屋崎には大きな河川がなく堆積作用が生じにくいので、変化が少なかったのではないかと考えられている¹⁵⁾。よって本稿では、古墳時代の海岸線を縄文時代の海岸線と同じ線で想定している。【図参照】

本稿で扱う津屋崎地区の海浜型古墳の多くは、勝浦潟の東岸に面した海抜一〇〇メートルという比較的低い海岸段丘・丘陵上に立地する。

勝浦高原古墳群、勝浦乗越古墳、勝浦水押古墳群は9期から10期に造られた規模A群の古墳である。勝浦高原古墳群の規模B群の古墳は群集墳内へ突出した階層の古墳と考える。

勝浦峯ノ畑古墳は、胸形君が墓域をそれまでの内陸部から海岸部へ移した最初の古墳で、7期に造られた。全長一〇〇メートルの前方後円墳で、副葬された鏡に沖ノ島二一号祭祀の鏡と同型鏡がある。隣接して7期の規

模B群の勝浦高堀古墳、8期の規模C1群の勝浦井ノ浦古墳があり、入海の最奥部の丘陵上に胸形君の墳墓群が築かれている。

新原・奴山古墳群は8期に胸形君の墓と考えられる規模C1群の前方後円墳の二二号墳が造られる。規模C1群の円墳の二五号墳、規模B群の前方後円墳の一号墳、一二号墳、三〇号墳、円墳の二〇号墳、方墳の七号墳は胸形君の近親者クラスの墓と考える。9期の円墳で低い丘陵に立地する古墳分類A群t類に該当する古墳は胸形君に仕えた者の墓と考える。後世の開発によって墳丘が失われて周溝と主体部しか残っていない四九号墳から五九号墳は、立地t類の円墳群より低い階級の墓と考える。

須多田古墳群では、8期に規模C1群の円墳の須多田ニタ塚古墳が造られ、その後、規模B群の前方後円墳の須多田上ノ口古墳、9期に規模C1群の前方後円墳の須多田天降天神社古墳、須多田ミソ塚古墳、10期に規模C1群の須多田下ノ口古墳、在自剣塚古墳へと継続して古墳が造られる。首長墓級の海浜型古墳はこの在自剣塚古墳が最後である。

発掘調査された古墳からみた副葬品は刀剣、刀子、鉄鏃、装身具を副葬する古墳が多い。漁具は少なく勝浦水押一号墳の土錘と新原・奴山四一号墳と在自鬼塚裏一号墳からのヤスのみで、海に関わる古墳として意外に感じる。農具はいずれの古墳からも出土していない。地域集団の構成員の墓と考えられるA群の古墳の多くに刀剣・刀子・鉄鏃を副葬していることは注目される。

小結

広瀬が海浜型前方後円墳の諸段階として示す三段階について⁽⁵⁾、津屋崎地区での様相を示し小結とする。第一段階とされる三世紀中頃から四世紀後半は津屋崎地区において主要な古墳はみられない。津屋崎地区とは山を隔てた内陸部に4期の全長六四メートルの東郷高塚古墳がある。宗像の内陸部は釣川が東西方向に流れ、弥生時代以来の穀倉地帯を形成する。この釣川流域において宗像地域の前期古墳は造られる。

広瀬の第一の画期とされる四世紀後半はヤマト王権が関与した祭祀が沖ノ島で始まった時期である。その後の六世紀後半までが第二段階、前方後円墳集成編年の5期から8期までがこの段階となる。それまで釣川流域で造られていた主要な古墳が海岸部の津屋崎地区へと移動して造られる。これらの多くが海浜型古墳で、規模はB群・C1群である。沖ノ島祭祀は朝鮮半島における国際情勢を契機に始まったとされる⁽⁶⁾。広瀬も指摘するように、宗像の地政学的位置により宗像と朝鮮半島での政治行動との関連性から、津屋崎地域の海浜型古墳の築造を理解できる。

六世紀後半から七世紀前半までの第三段階、前方後円墳集成編年の9期から11期も、津屋崎地区では前方後円墳等の規模の大きな海浜型古墳が継続して造られる。この段階には「海の群集墳」といえる規模の小さなA群の古墳が数多く造られる。広瀬は宗像地域を朝鮮半島へ兵力を派遣する出発港と想定している⁽⁷⁾。これら9・10期の海浜型古墳は勝浦潟沿岸や釣川河口付近の丘陵斜面に数多く造られる。これらの古墳を含め、玄界灘沿

岸を中心とするより広範囲な海浜型古墳については次稿でふれたい。

(福津市文化財課)

註

- (1) 近藤義郎「牛窓湾をめぐる古墳と古墳群」『私たちの考古学』一〇、考古学研究会、一九五六年
- (2) 西川宏、今井堯、是川長、高橋護、六車恵一、潮見浩「3瀬戸内」『日本の考古学』IV古墳時代上、河出書房新書、一九六六年
- (3) 間壁忠彦「沿岸古墳と海上の道」『古代の日本』第4巻中国・四国、角川書店、一九七〇年
- (4) 森浩一「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海を越えての交流』中央公論社、一九八六年
- (5) 広瀬和雄「海浜型前方後円墳を考える」『海浜型前方後円墳の時代』同成社、二〇一五年
- (6) 海古墳を考える会『海古墳を考えるI 群集墳と海人集団』二〇一一年、『海古墳を考えるII 西部瀬戸内、灘と瀬戸から見た古墳とその景観』二〇一二年、『海古墳を考えるIII 紀伊の古代氏族と紀淡海峡地域の古墳』二〇一三年、『海古墳を考えるIV 一列島東北部太平洋沿岸の横穴と遠隔地交流』二〇一四年、『海古墳を考えるV 日本海の潟湖と古墳の動態―北陸からの視点―』二〇一五年、『海古墳を考えるVI 三河と伊勢の海―古墳時代の海道を往還する―』二〇一七年
- (7) 本稿では古代の宗像地域の首長層を「胸形君」と表記する。

- (8) マウンドを持つ高塚墳だけではなく古墳時代の墳墓全てを含む。
- (9) 魚津知克「趣旨説明―海の高墳―研究序説―」註(6)前掲『海の高墳を考えるI』
- (10) 魚津知克「海の高墳」研究の意義、限界、展望『史林』一〇〇巻一号、史学研究会、二〇一七年
- (11) 増野晋治「山口県域における瀬戸内の前期古墳について―中期前半までを対象に―」註(6)前掲『海の高墳を考えるII』
- (12) 広瀬和雄「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成 九州編』山川出版社、一九九四年
- (13) 魚津は(10)ではB群に含まれる円墳について単に「主要円墳」、C1群は「大型円墳」としか示していない。本稿では暫定的にB群の円墳を径二五〜三〇メートル、C1群の円墳を三〇メートル以上と分類する。
- (14) 魚津はC群を1・2の小群に細分している。C2群には大阪湾岸における近畿中央部支配者層の「海の高墳」を設定している。兵庫県の五色塚古墳や西求塚古墳、大阪府の乳岡古墳等を具体例に示している。これは津屋崎地区では該当しないので説明を省く。
- (15) 下山正一「新生代第四系の地形と地質」『津屋崎町史 通史編』津屋崎町、一九九九年
- (16) 「慶長年間筑前国図」『福岡県史資料』第2輯付図、福岡県立図書館蔵
- (17) 四世紀後半の高句麗の南下に対して百済が倭に助力を求め、これに応じた倭が朝鮮半島に出兵した。これらの対外交渉が沖ノ島祭祀の要因のひとつである。

表1 参考文献

- 1 石山勲編『新原・奴山古墳群』福岡県文化財調査報告書第五四集、福岡県教育委員会、一九七七年
- 2 川述昭人「第一〇号墳」『新原・奴山古墳群』同右第五四集、同右、一九七七年
- 3 児玉真二「奴山古墳群」津屋崎町文化財調査報告書第三集、津屋崎町教育委員会、一九八一年
- 4 橋口達也「新原・奴山古墳群」同右第六集、同右、一九八九年
- 5 池ノ上宏・安武千里「在自遺跡群II」同右第一〇集、同右、一九九五年
- 6 池ノ上宏・安武千里「須多田古墳群」同右第二集、同右、一九九六年
- 7 安武千里「勝浦北部丘陵遺跡群」同右第一三集、同右、一九九八年
- 8 池ノ上宏「新原・奴山古墳群II」同右第一七集、同右、二〇〇一年
- 9 安武千里「勝浦高堀遺跡」『津屋崎町内遺跡』同右第一九集、同右、二〇〇二年
- 10 池ノ上宏「勝浦高原遺跡第二次調査」『津屋崎町内遺跡』同右第一九集、同右、二〇〇二年
- 11 池ノ上宏・田上浩二「津屋崎古墳群I」同右第二〇集、同右、二〇〇四年
- 12 池ノ上宏・吉田東明「津屋崎古墳群II」福津市文化財調査報告書第四集、福津市教育委員会、二〇一一年
- 13 佐々木隆彦「奴山正園古墳」同右第六集、同右、二〇一三年

本誌の既刊行分データは以下のホームページよりダウンロードできます。
<https://www.okinoshima-heritage.jp>

沖ノ島研究 第六号

2020(令和2)年3月発行

発行:「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群保存活用協議会
(事務局:福岡県 人づくり・県民生活部文化振興課世界遺産室
〒812-8577 福岡県福岡市博多区東公園7番7号)

OKINOSHIMA RESEARCH MONOGRAPH

6

CONTENTS

	Page
IKENOUE Hiroshi	
Mounded Tombs and Graves by the Sea in Tsuyazaki, Fukutsu City	1
 KUWATA Kazuaki	
Villages held by Munakata Ujisada seen from <i>onkome-chushinjo</i> and <i>onbeisen-chushinjo</i> (Investigative Reports of Taxes)	9
 NOGI Yuudai	
The Last Edict (<i>kudashibumi</i>) from the Headquarter of Dazaihu Shugo (Dazaifu Shugo-sho) and the Munakata Daiguji Family	25
 HANAOKA Okifumi	
Recent Discoveries Regarding Toyotomi Hideyoshi Documents and the Higo Munakata Families	37
 OKA Takashi	
Research on the Views toward the Okinoshima Island	61
 KAMAKA Takanori, MATSUMOTO Shoichiro, OHTAKA Hirokazu	
Research on Okitsu-miya Yohaisho at Odake, Wakamatsu Ward, Kitakyushu City	67
 Summary Report of Investigations on the “Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region,” 2019	81

2020

Preservation and Utilization Council of the
Sacred Island of Okinoshima and Associated Sites in the Munakata Region